利根川の南岸にも取手市が・・・

地図が語る対岸飛び地の歴史

関東平野を北から東へとゆったりと流れ、太平洋に注いでいる利根川は流路延長 322km、流域面積 16,840 平方キロを有する日本最大規模の一級河川です。利根川流域には、旧石器時代から人々の生活の痕跡があり、また、今日においても母なる川として人々の生活を支えています。この河川の流域の「取手」という一地域の人々に焦点を当て、その治水・利水の歴史の一コマを、地図を通してひもといて見たいと思います。

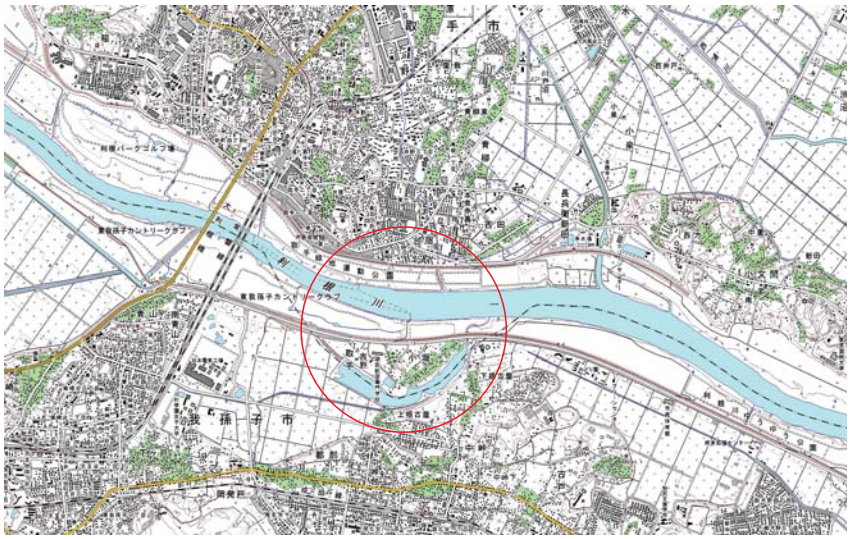
■最新の2万5千分１地形図「取手」そこから見えてくるものとは…

最新版（平成19年更新）の「取手」の地図を見ていると、利根川の南岸に、ポツンと取り残されたように、取手市の一部である小堀（おおほり）地区の存在がわかります。

また、この辺りでは、県境が河川中央からはずれ、南側に大きく蛇行して陸地に食い込んでいます。

昔を知らない人には、この県境の蛇行とそれに伴い生じている取手市の対岸「飛び地」の存在は、地理的にも不自然さを感じるものとなっています。

２万５千分１地形図「取手」の一部拡大図

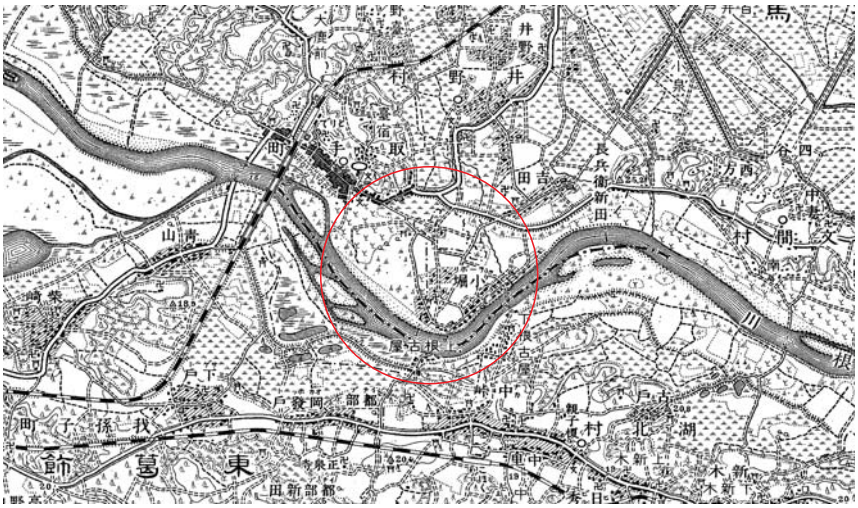


■旧版図の5万分１地形図「龍崎」が語る真相とは…

そこで、古い版（明治36年測図）の地図を見てみると、小堀（おおほり）地区は取手中心部としっかりと地続きになっています。

この時代を隔てた新旧2枚の地図の違いの要因を究明するため、利根川の治水・利水の歴史をひもといて見ますと、明治44年（1911年）から大正９年（1920年）にかけて、取手市の南側で大蛇行して流れていた利根川の河川改修工事が行われていたのです。その結果、小堀（おおほり）地区は取手市の「対岸飛び地」として、新たな歴史を歩んでいたのです。

５万分１旧版地形図「龍ケ崎」の一部拡大図



■「小堀（おおほり）の渡し」の誕生について

利根川の改修工事の結果、極端な蛇行による河川の氾濫はなくなりましたが、小堀（おおほり）地区の人たちは、広い利根川で分断されたことで、取手市街への交通が大変不便になりました。そこで、この不便さを解消するため、地域住民の協議で渡し船が始まり、今日に至っています。また、県境は旧河川跡である古利根沼の中心を変わらずに通っており、改修前の河川の流路を物語っています。

今も地区の足となっている「小堀の渡し」の情景

出典：取手市 HP